慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	『水滸伝』文簡本の泣き描写
Sub Title	Portrayals of crying in the simpler : text versions of Shuihu Zhuan
Author	石川, 就彦(Ishikawa, Narihiko)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2020
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.118, (2020. 6) ,p.41 (202)- 58 (185)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01180001-0041

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『水滸伝』文簡本の泣き描写

石川　就彦

一　序言

明代長篇白話小説『水滸伝』には数多くの泣き描写が描かれる。特に梁山泊の首領である宋江の泣きぶりは目立つ。その姿は『三国志演義』の劉備、『西遊記』の三蔵玄奘等とも共通する。宋江に限らず、『水滸伝』で描かれる感情表現は、人物像の形成に少なからず影響を与えている。例えば明末清初に編まれた全七十回の金聖嘆批評『水滸伝』（以下、「金聖嘆本」）では、泣き描写の人物像への影響を意識した改変が散見される。[1] しかし、『水滸伝』諸版本における感情表現とその人物像への影響関係を論じた研究はさほど多くない。[2]

『水滸伝』の版本研究は日中で盛んに行われており、その版本系統は非常に複雑である。それらの版本はテキストの詳細な「文繁本」と簡略な「文簡本」に大きく分けられる。文簡本は文繁本のテキストを削って成立したものとされており、それらのテキストの調査により、版本の発展状況を垣間見ることが可能である。

そこで本稿は、文簡本における泣き描写の改変状況の調査[3]から、文繁本から文簡本への発展過程における泣き描写の扱わ

れ方、更にはその意図や効果、価値についての考察を目的とする。

二　『水滸伝』文簡本諸版本

『水滸伝』文繁本は大きく「百回本」「百二十回本」「七十回本」の三種に分けられる。文簡本は百回本を基にしたものとされており、[4] 百回本の内容に征田虎故事と征王慶故事とを加えて成立した。田虎王慶故事（以下、「田王故事」）が『水滸伝』の物語として本格的に取り込まれたのは文簡本が最初であり、その文簡本から着想を得て田王故事を全二十回（第九一回から第一一〇回）にまとめて成立したものが百二十回本である。

本稿では現存する文繁本中最古の完本である「容与堂本」（以下、「容本」「容」）を用いる。[5] しかし、本稿で使用する文簡本「評林本」の刊行年（一五九四）が容本の刊行年（一六一〇）に先行することには留意すべきである。以下に、本稿で使用した文簡本三種の書誌情報を示す。

①『水滸志傳評林』（以下、「双峰堂本」「双本」「双」）

全二十五巻。「京本増補校正全像忠義水滸志伝評林」。現存する完本の文簡本中最古である。祖本に「パリ本」がある。第三一回以降回数表示がなくなる。書肆の余象斗により刊行。巻頭に「萬暦甲午歳（万暦十二年、一五九四）臘月吉旦序」とあり容本に先行し、本文は容本と近いとされる。[6] 日光輪王寺慈眼堂天海藏所蔵。『古本小説叢刊』（第十二輯、全三冊、中華書局、一九九一年）を使用。

②『水滸忠義志傳』（以下、「劉興我本」「劉本」「劉」）

全二十五巻百十五回。書肆の劉興我により刊行。巻頭の「叙水滸忠義志傳」末尾に「戊辰長至日清源汪子深書于巣雲山房」とあり、「戊辰」は崇禎元年（一六二八）だと推定される。[7] 東京大学東洋文化研究所双紅堂文庫所蔵。本文は双本との関係が指摘されている。[8]『古本小説叢刊』（第二輯、全二冊、中華書局、一九九〇年）を使用。

③『二刻英雄譜』（以下、「二本」「二」）

全二十巻百十回。「精鐫合刻三国水滸全伝」。刊行は崇禎年間（一六二八―一六四四）であると推定される。[9] 上下二段からなり、上段は『水滸伝』、下段は『三国志演義』である。本文は双本に近似するとされる。[10] 筑波大学、京都大学、内閣文庫所蔵の三種のうち、原刻に最も近いとされる筑波大学附属図書館所蔵本を使用。[12]

文簡本には、百回本に無い泣き描写の追加や、泣き描写の削除が多く見られた。第三章では前者を、第四章では後者を扱う。但し、第三、四章の調査は百回本と共通する内容のみに限り、田王故事については第五章で論じる。

三　文簡本で追加された泣き描写

本章では文簡本が追加した泣き描写について論じる。調査の結果、容本に無い泣き描写のうち、文簡本三種全てに存在するものは十四箇所、劉本のみに存在するものは六箇所であった。次の【表A】に該当場面を示した。尚、本稿の表中の「資料番号」は本章で引用する際に附した番号と共通しており、引用する資料には表中の資料番号上に「※」を附した。また、本稿で示す回数は言及が無い限り全て容本に基づくこととする。

【表A】泣き描写改変状況一覧表

〔凡例〕○＝泣き描写有　×＝泣き描写無　◎＝他の二種と異なる泣き描写有　●＝三種共に異なる泣き描写有

資料番号	回	双	容	劉	二	動作主	場面	起因する心情等
三―一	二	×	×	○	×	王四	少華山からの返書を失くして	焦り
三―二	二一	○	×	○	○	閻婆	娘が宋江に殺されて	悲しみ

三―三	三七	×	×	○	×	○	宋江	穆弘に追われて
三―四	三七	×	×	○	×	○	宋江	穆弘に追われて
※三―五	三七	○	×	○	○	×	宋江・役人	張順に身ぐるみを剝がされて
三―六	四〇	×	×	○	×	○	宋江・戴宗	刑場に連行されて
三―七	四三	○	×	◎	○	○	李逵	母を見失って
※三―八	四四	○	×	◎	○	○	李逵	母の死を語って
※三―九	四四	○	×	◎	○	○	好漢達	李逵の母の死の話を聞いて
三―十	五二	×	×	○	×	○	柴進	伯父（柴皇城）が死んで
三―十一	五四	○	×	○	○	○	宋江	柴進の死を確信して[13]
三―十二	六一	○	×	○	○	○	賈氏	旅立つ盧俊義に対して
三―十三	六二	○	×	○	○	○	盧俊義	李固に騙されたと気付いて
三―十四	六二	×	×	○	×	○	盧俊義	冤罪を受けた我が身を案じて
三―十五	六二	●	×	●	●	●	燕青	連行される盧俊義を見て
三―十六	七一	○	×	○	○	○	宋江	李逵を叱ったことを後悔して
三―十七	七三	○	×	○	○	○	李逵	荊を背負って宋江に謝罪して
三―十八	八三	○	×	○	○	○	宋江	仲間の下士の処罰を命じて
三―十九	九四	○	×	◎	○	○	好漢達	張順の死を知って
三―二十	九七	○	×	○	○	○	宋江	鄭彪の妖術にかかって

恐怖	恐怖
恐怖	恐怖
恐怖	恐怖・悲しみ
焦り・「孝」	悲しみ・「孝」
悲しみ	悲しみ
悲しみ	悲しみ・「義」[14]
悲しみ	恐怖
悲しみ	悲しみ
悲しみ・「忠」	後悔
申し訳無さ	悲しみ・「義」
悲しみ・「義」	悲しみ・「義」
恐怖	

まず追加された泣きの要因に着目すると、「悲しみ」や「恐怖」に起因する泣きが目立つ。悲しみに泣く描写は『水滸伝』全体を通じて非常に多い。しかし一方で、恐怖に起因した梁山泊好漢の泣きはほとんど見られないのである。[15] 以下に追加された恐怖に起因する泣き描写の一例を示す。尚、示した訳文は容本訳である。

〈三―五〉宋江が張横に身ぐるみを剝がされた場面（第三七回）

【容】 宋江和那兩個公人**抱做一塊** 恰待要跳水

【双・二】 和 公人**抱** **哭**恰 要跳水

【劉】 和 公人**抱** **哭**恰 欲跳水

（宋江と二人の役人は抱き合って一塊になり、跳び込もうとした）

一般民衆が死の恐怖に襲われて泣く描写は『水滸伝』内でも非常に多い。それらのほとんどは、戦争や賊に襲われたこと等による死の恐怖に起因するものである。そのため、基本的に敗北しない梁山泊好漢が恐怖に怯えて泣くことが少ないのは妥当である。しかし〈三―五〉のように、好漢の命に危険が及ぶ場面も少なからず存在するにも拘らず、容本はそこに泣き描写を加えていないのである。文簡本作者はそこに違和感を覚えたのであろう。たとえ好漢であろうと一貫して「泣くのが自然である」として泣き描写を追加しているのである。こうした泣き描写の追加により、宋江と盧俊義の恐怖心が強調され、切迫感が増している。

また、劉本が追加した恐怖に起因する泣き描写六箇所中、五箇所（双本・二本では三箇所中、二箇所）が宋江の泣きである点も注目すべきである。前述の如く容本では宋江を含む梁山泊好漢が恐怖で泣くことはほとんど無い。しかし文簡本は宋江が恐怖で泣く描写を五箇所も追加した。更に言えば、文簡本が追加した泣き描写全二十箇所中、八箇所（三種共通五箇所、劉本のみ三箇所）が宋江の泣き描写である。その回数は他と比べて群を抜く。

文簡本は文繁本より商業性が強いため、「商品」に手を加える際に読者の嗜好や要求に従うのは当然である。つまり泣き描写の追加にも、作者の価値観を表明する意図の他に、商業的意図の存在の可能性も考慮する必要がある。[16]

『水滸伝』に限らず、『三国志演義』や『西遊記』等においても、リーダーとなる人物はよく泣く人物として描かれる。主要な長篇白話小説が同傾向を示していることから、「よく泣くリーダー像」は当時の小説中のリーダー像としてステレオタイプ化しており、読者もそのような人物の登場を求めていたのであろう。文簡本は、この風潮・要求に応じて「よく泣く宋江像」を一層強調しようとしたと考えられる。しかも、追加された宋江の泣きの過半数は「忠」「孝」「義」といった通常称揚される精神による泣きではなく、恐怖といった「弱く頼りない」印象を読者に与える泣きである。文簡本は、宋江の泣き描写の追加により、単に「よく泣く宋江像」を強化しようとしただけではなく、特に恐怖に怯える「弱く頼りない宋江像」を印象付けようとしたと推察される。

恐怖以外についても、文簡本作者が「泣くのが自然である」と考えた箇所に泣き描写が追加されていると思われる。〈三―二〉の閻婆が閻婆惜の死に対して泣く場面等がその例である。『水滸伝』中の肉親の死に対しては、総じて泣き描写が出現する。娘を殺されたにも拘らず泣かないことに対して、文簡本作者は不足を感じたのであろう。

泣き描写の追加は、その起因する心情を強調する。総じてこれらの泣き描写の追加は、命の危険に対する恐怖や肉親・仲間の死に対する悲しみ等の比較的強い（作者が「強くあるべき」と考える）感情を強調する意図を持っているものと考えられる。そして劉本はその傾向が最も強いのである。

強烈な感情に起因する自然な発露としての泣きが意識される一方、「孝」「忠」「義」の精神に起因する泣き描写も少数ながら見られる。例えば〈三―十八〉では、役人を殺した兵士を処刑する場面に「忍涙」の二字が加えられている。しかし、特に宋江について言えば、容本で頻繁に描かれるような仲間を思って泣く姿よりも、文簡本が描いた恐怖に怯えて泣く姿の方が目新しい描写であることは否めない。

また、異なる感情表現を用いることによって文意を大きく変えた箇所も見られた。

〈三―八・三―九〉李逵が母の死の経緯を話して泣き、それを聞いた好漢達も泣く場面〈第四四回〉

【容】 李逵訴説取娘至沂嶺被虎吃了因此殺了四虎　又説假李逵剪徑被殺一事衆人大笑晁宋二人笑道　被你殺了四個猛虎今日山寨裡又添的兩個活虎上山正宜作慶　**衆多好漢大喜**

【双・二】 李逵訴説取娘情由　**大哭一遍**　晁盖等　曰我叫你從容差人去接不致此災言畢　**衆皆含涙不已**

【劉】 李逵訴説取娘情由　**大哭一回**　晁蓋等　曰我叫你從容差人去接免有此災　**衆皆含涙不已**

（李逵がおっかさんを沂嶺まで連れて来たが、虎に食われてしまったので、四頭の虎を殺した話をし、また、追剝ぎのニセ李逵を殺したことを説明すると、みな大笑いした。晁蓋と宋江の二人は、笑いながら言った。「四頭の虎がおまえに殺されたが、今日、皆にまた新たに二人の生きた虎が加わったのだから、祝宴だ！」好漢たちは大喜びし）

容本の李逵は、「母を食べた虎を殺した話」と「偽の李逵（李鬼）に殺されそうになった話」をして、好漢達は前者には反応を示さず後者に対して笑っている。その上晁蓋と宋江は、仲間が増えたと笑い、皆で喜んでいる。

一方で文簡本の李逵は母の死のみを語って大泣きし、それを聞いた好漢達は皆涙を流す。これらを比較すると、容本と文簡本とでは着眼点が全く異なることが分かる。[17] 容本は李逵の母の死よりも李逵が虎を殺したことに、更には虎殺しの話よりも仲間が増えたことに重きを置いている。つまりこの場面では「肉親の死」よりも「聚義」が高い優先度を有しているのである。本稿ではこれ以上論じないが、これは「義」の精神が儒教的倫理観を超越しているとも言える。[18]

以上、文簡本で追加された泣き描写は、強烈な感情に起因する自然な発露としての泣きが主に意識されていることが分か

った。それにより、感情の強さが一段と強調され、描写の臨場感も増す。また宋江について言えば、「弱く頼りない、よく泣く宋江像」の強調が意図されている。その傾向は文簡本で共通しており、劉本が最も強い傾向を示した。

四　文繁本から削除された泣き描写

テキスト簡略化の過程において多くの泣き描写が削除された。本章では文簡本が削除した泣き描写について論じる。追加された泣き描写同様、削除された泣き描写も多く存在する。調査により、全四十箇所で泣き描写の削除が確認された。削除された泣き描写の動作主の内訳は、宋江十三箇所、宋江を除く梁山泊好漢十箇所、女性（潘金蓮・潘巧雲・賈氏）六箇所、その他の人物（一般兵士、一般住民を含む）十一箇所であった。全体の泣き描写の回数から考えれば、宋江に対する削除が最も多いのは妥当である。これらの泣き描写の削除意図は主に二つの観点から考えることができる。

一つ目は「物語展開の観点」である。物語の展開上、必要ないとされたために削除されたということである。一般兵士や一般住民を含む、その他の人物の泣きがそれにあたると考えられる。

二つ目は「キャラクター像への影響の観点」である。泣き描写の追加が人物像の強調の効果を持つのと同様、泣き描写を削除することによってその人物の性質を改変しようとした可能性があるのである。

ここでは前章でも取り上げた宋江に焦点を当てることとする。削除された宋江の泣きを**【表B】**にまとめた。

【表B】文簡本が削除した宋江の泣き描写一覧表　〔凡例〕×＝該当文無し

資料番号	回	容本	双本	場面	要因
四―一	二二	三人**洒涙不住**	×	父・弟と別れて	孝
四―二	三五	張社長見了宋江容顔不樂**眼泪暗流**	張社長見宋江容顔不樂	故郷の父を思って	孝

四―三	三七	當下衆人**洒淚而別**	各辞両**別**	穆弘等と別れて	義
四―四	八三	宋江**大哭一場垂淚上馬**	×	下士を斬首して	義
四―五	九四	看不分曉就**哭覺來**	×	張順の霊が夢に出て	義
四―六	九四	宋江在當中證盟朝着湧金門下**哭奠**	宋江當中証盟朝着湧金門下	張順を祀って	義
四―七	九四	宋江親自把酒澆奠仰天望東而**哭**	×	張順を祀って	義
四―八	九五	宋江聽得又折了雷横龔旺兩箇兄弟**淚如雨下**	宋江又聽説折却雷横龔旺苗道成倪宣死了	雷横・龔旺が死んで	義
四―九	九五	誰想今日却死于此處因作詩一首**哭之**	誰想今死**嘆云**	劉唐の死を悼んで	義
四―十	九七	宋江**正哭之間**	×	項充等が死んで	義
四―十一	九七	宋江聽得又折燕順馬麟扼腕**痛哭不盡**	宋江听説**大怒**	燕順・馬麟が死んで	義
四―十二	九九	且説先鋒使宋江思念亡過衆將**洒然淚下**	×	亡き兄弟達を偲んで	義
四―十三	九九	宋江**垂淚不起**	×	徽宗の言葉に対して	忠

以上の削除された宋江の泣き描写は全て「孝」「忠」「義」に起因していると分かる。追加された宋江の泣き描写の大半が「孝」「忠」「義」以外の心情に起因するのとは対照的である。特に「義」に起因する泣きの削除が目立ち、「義」を重んじる宋江像を意識的に薄めようとした可能性が考えられる。この点においては、宋江の泣き描写の追加と削除の傾向は一貫していると言える。前章の調査結果と合わせて考えると、概して「親・国・仲間に対して泣く、息子・臣・首領としての宋江像」を薄めて、「弱く頼りない、よく泣く宋江像」を強く印象付けようとしたと思われる。

五　田虎王慶故事における泣き描写

次に、水滸物語後半部に描かれる田王故事における泣き描写について考察する。[19] 先にも触れたが、田王故事を水滸物語に本格的に加えたのは文簡本が最初であり、百二十回本は文簡本を参照したとされる。本章では、文簡本と百二十回本の田王故事における泣き描写を比較する。百二十回本は種々存在するが、本稿ではその中でも古い系統の版本とされる宮内庁書陵部所蔵「徳山毛利本」（以下、「徳本」「徳」）を使用する。[20]

文簡本と百二十回本の間で降将の扱いに差がある点について、笠井直美氏は次のように指摘する。

> 文簡本は楊定見本と比べた場合、後から降参してきた将の地位が相対的に高い。（略）亡くなった時の供養のされ方も手厚い（こういった描写は楊定見本では落とされ、せいぜい宋江が大変嘆いた、といった程度になる）。つまり、文簡本においては賊軍から降参してきた将も、（降参しないで死んだ将も、その親玉田虎・王慶さえも）、同じ好漢の一人、対等な相手として扱われており、梁山好漢との質的な相違はほとんど感じられないと言えよう。[21]

このように笠井氏は、梁山泊好漢と降将の地位や、両者の関係に差異があると指摘する。そのため百二十回本の結義は文簡本よりも閉鎖的・排他的であり、[22] 百二十回本は「正義の宋江軍対悪の賊軍」という対立構造を創作したと述べる。[23] 更には文簡本の田王故事の挿増は、新たに登場する豪傑の話を楽しむことを目的とし、宋江の「忠」「義」の強調を目的としていないと述べる。[24] そこで本章では、田王故事内の泣き描写でも同様の傾向が見られるのか検証する。

田王故事における文簡本の泣き描写は、全二十七箇所出現した。この二十七箇所の泣き描写は文簡本三種に等しく存在し、字句も大体一致する。人物に目を移すと、宋江十二箇所、王慶三箇所、孫安二箇所、瓊英一箇所等と続く。一方、百二十回本の田王故事における泣き描写は全四十八箇所であった。戦いの描写にかなりの紙幅を割いていることもあ

り、敗将や一般住民の泣き描写が多い。人物別に見ると、宋江の泣き描写が最多の八箇所存在した。

以上から、徳本と文簡本では共通して宋江が最も多く泣くことが分かる。前章までと同様、本章も宋江に焦点を当てる。文簡本田王故事中の宋江の泣き描写を次の【表C】に示す。尚、文簡本の原文は双本に基づく。

【表C】文簡本田王故事における宋江の泣き描写一覧表　〔凡例〕梁＝梁山泊好漢　降＝降将

資料番号	回	文簡本（双本）	対象	場面
五―一	八六	宋江忽思穆横[25]等被陥**潸然涙下**曰	梁	捕らえられた穆弘等を思って
五―二	八九	來見宋江報説孫将軍自引十員将打城陥死宋江听得**大哭**曰	降	孫安配下の十将の戦死を聞いて
五―三	八九	蕭讓讀畢宋江**放声大哭**曰	降	戦死した十将を祀って
五―四	九一	宋江見説**大哭**	梁	魯智深の行方を案じて
五―六	九九	回見宋盧二先鋒訴説拆了任光宋江**不勝悲泣**	降	任光の死を聞いて
五―七	一〇〇	宋江哭曰余将軍死不辱君甘受其戮是宋某之罪食其肉當報此仇**哭之不止**又報	降	余呈が忠心を貫いて死んだと聞いて
五―八	一〇〇	宋江**搵泪**回入洮陽	降	余呈を祀って
※五―九	一〇三	宋江正憂燕青又得此報**掩面大哭**曰	降	孫安の病死を知って
五―十	一〇三	令其子孫岳掛孝擺列祭儀**大哭**而祭哀動三軍	降	孫安を祀って
五―十一	一〇四	宋江執其手**哭**曰	降	火傷を負った曹洪を見舞って
五―十二	一〇五	两個連人帶馬都陥入溪裡溺死宋江**痛哭不已**	降	于茂の戦死を聞いて

【表C】から、梁山泊の好漢に対する泣きは僅か二つであることが分かる。これら以外は全て降将に対して泣いたもので

ある。徳本と比較するとその違いは歴然である。文簡本において、降将の死や負傷に対する宋江の反応は、梁山泊好漢に対するそれと大きな差異が無い印象を受ける。続いて徳本田王故事中の宋江の泣き描写を【表D】に示す。

【表D】徳本田王故事における宋江の泣き描写一覧表　〔凡例〕梁＝梁山泊好漢

資料番号	回	徳本	対象	場面
五―十三	九三	宋江説到此處**不覺潸然淚下**	梁	兄弟達に世話になったと語って
五―十四	九五	宋江聞報大驚**哭**道	梁	李逵を案じて
五―十五	九六	**不覺潸然淚下**	梁	李逵を案じて
五―十六	九七	宋江等衆人俱**感泣淚下**	梁	兄弟たちと再会して
五―十七	九七	宋江**感泣**稱讃	梁	李逵等が敵に屈しなかったと聞いて
五―十八	九八	宋江聽説**滿眼垂淚**	梁	魯智深等を案じて
※五―十九	一〇八	宋江聽罷**不覺失聲哭**道	梁	蕭讓等を案じて
※五―二十	一〇八	宋江**嗚咽**答道	梁	蕭讓等を案じて

文簡本とは対照的に、徳本の宋江の泣きは全て梁山泊の好漢に対するものである。梁山泊の好漢以外に対しては一度たりとも泣かない。宋江軍に降り、共に戦った降将の死に対して嘆くことはあるが泣くことはないのである。

例えば、孫安が病死した場面を挙げる。文簡本では宋江が孫安を悼んで大泣きしている。一方で徳本では、孫安の訃報を受けて泣くのは宋江ではなく、孫安と親交の深い喬道清であった。尚、以下二例の訳文は徳本訳である。

〈五―九〉孫安が病死したと聞いた場面（徳本第一一〇回）

【双】 宋江正憂燕青又得此報**掩面大哭**曰

【徳】 **宋江悲悼不已**以禮殯殮葬于龍門山側**喬道清因孫安死了十分痛哭**

（宋江は深くその死を悼み、手厚い礼を以てその遺骸を棺に納め、竜門山のほとりに埋葬した。喬道清は孫安に亡くなられて、ひどく嘆き悲しみ）

更には、唐斌が殺され蕭譲等が捕らえられた一報を聞いた場面では、宋江は蕭譲等を案じて嗚咽するが、殺害された唐斌に対しては一切の言及が無い。

〈五―十九・五―二十〉唐斌が殺され蕭譲・裴宣・金大堅が捕縛されたと聞いた場面（徳本第一〇八回）

【徳】 唐斌被縻貹殺死蕭譲裴宣金大堅都被活捉去（略）宋江聽罷不覺失聲哭道**蕭譲等性命休矣**（略）宋江嗚咽答道（略）**我今日特差唐斌領一千人馬護送他三箇去不料被賊人捉擄三人必被殺害**

（唐斌はついに縻貹に討ちとられ、蕭譲　裴宣　金大堅らはみないけどりにされて、つれて行かれました。（略）宋江はそれを聞くと、思わず声を出して哭きながら、「蕭譲らの命はもうだめか」（略）宋江は嗚咽しながら、「（略）それでわたしはきょうわざわざ唐斌に兵一千をつけて彼ら三人を護衛して行かせたのですが、それが賊にとりこにされようとは。三人はきっと殺されるでしょう」）

以上のことから、徳本と文簡本における降将に対する扱いの違いは、泣き描写の分析によって十分補完し得ることが明らかになった。文簡本の宋江は降将を仲間と認め、その死を激しく悼む。徳本の宋江は梁山泊好漢以外の仲間の死には涙を流さないことから、百二十回本作者は意図的に降将と梁山泊好漢の間に厳格な隔たりを作ったと言える。

両者を比較すると、宋江の「義」の適用範囲に差異があると言える。文簡本の宋江の「義」の適用範囲、つまり仲間としての強い繋がりが認められる人物には降将も含まれる。それに対し徳本は、文簡本を基にして田王故事を創作したものの、宋江の「義」の適用範囲を縮小し、梁山泊好漢の繋がりのみを強調した。このような点から、笠井氏が指摘した降将の扱いの違いについて、宋江の泣き描写を比較すると、宋江の「義」の適用範囲に含まれるか否かという点においてはっきりと同様の傾向が現れることが明らかになった。これにより作者が泣き描写に対して一定の利用価値を見出していたと認めることができる。泣き描写を通じて、文簡本作者は降将に対する寛容的・包括的態度を、百二十回本作者は非寛容的・排他的態度をそれぞれ一貫して表明し続けたのである。

六　結語

ここまで文簡本における宋江の泣き描写を中心に論じてきたが、本稿で明らかになったことを再度確認する。

まず文簡本が追加した泣き描写の大部分は、強烈な心情に起因する自然な泣きを意識していると考えられる。また追加された宋江の泣き描写からは、「弱く頼りない、よく泣く宋江像」を印象付けようとする意図が垣間見える。一方で削除された宋江の泣き描写からは、「親・国・仲間に対して泣く、息子・臣・首領としての宋江像」を薄めようという姿勢が見られる。更に田王故事中の宋江の泣き描写を比較すると、文簡本ではほとんどが降将に対して泣く一方で、百二十回本では梁山泊好漢に対してのみ泣く。つまり、宋江の「義」の適用範囲に違いがあることが判明した。これは作者が泣き描写に一定の価値を認め、自らの態度を大いに表明しようとしている表れである。

感情表現、特に泣き描写を利用して自らの価値観を表明する技法は、明末清初に至って更なる発展が見られることが判明している。[26] 更には、笑い描写や怒り描写等、その他の感情表現についても論ずべき点は存在すると思われる。[27] 文簡本を含む諸版本の比較により、感情表現の価値に対する認識・態度の差異や変遷が見えてくるだろう。今後、更なる研究を通じて総体的な考察を進めていきたい。

註

1　詳しくは拙稿「金聖嘆本『水滸伝』の泣き描写と批評」（『慶應義塾中国文学会報』、第四号、六一―八四頁、二〇二〇年三月）を参照されたい。金聖嘆は登場人物に対する自身の評価を泣き描写の改変を通じて表現していることが明らかになった。特に宋江に対する改変からは彼を貶める意図が、燕青に対する改変からは彼を称揚する意図が窺える。

2　『水滸伝』の泣き描写の論考には、汪遠平「《水滸》的哭態描写」（『吉林大学社会科学学報』、一九八五年第一期、五一―五七頁）があるが、版本を跨いだ検証を行っていない。『三国志演義』の泣き描写の論考では、吉永壮介「『三国志演義』の涙の力学」（『藝文研究』、第一〇五号第一分冊、二三―四〇頁、二〇一三年十二月）が最も詳しい。

3　嘆き表現や比喩表現等、検証対象の選定には議論の余地があるが、本稿では「泣くこと」を表す動詞八種（「哭」「泣」「号」「啼」「涙」「涕」「慟」「（哽）咽」）のみを対象とした。また、泣き描写の出現回数を数える際、回名や会話文中、詩詞中の泣きを表す語、動物の鳴き描写は除いた。同一の泣き描写の中に同じ字が複数用いられる場合は一回として数えた。設定した基準によっては異なる結果が出ると思われる。これらの動詞はそれぞれ泣き方や程度が異なると考えられるが、本稿では使われた語句の異同状況ではなく泣き描写の有無に主眼を置いて調査を進めた。

4　白木直也『水滸傳諸本の研究その一　巴黎本水滸全傳の研究』（著者自印、一九六五年）等参照。

5　容本の原文は『明容與堂刻水滸傳』（全四冊、上海人民出版社、一九七五年）、訳文は井波律子訳『水滸伝』（百回本、全五冊、講談社学術文庫、二〇一七年）に基づく。

6　涂秀虹「《水滸志伝評林》版本価値論―以容与堂本為参照」（『明清小説研究』、二〇一四年第二期、八六―一〇一頁）、九〇頁参照。

7　小松謙「『水滸傳』諸本考」（『京都府立大学学術報告 人文』、第六八号、五五―九一頁、二〇一六年十二月）、五九頁等参照。

8　丸山浩明『明清章回小説研究』（汲古書院、二〇〇三年）、「付録一 水滸伝簡本浅探―劉興我本・藜光堂本をめぐって―」、二三二―二三四頁参照。

9　注7小松氏前掲論文、九〇頁注7参照。

10　『二刻英雄譜』（全三冊、同朋舎、一九八〇年）、第三冊巻末「解説」（小川環樹著）、四頁参照。

11　氏岡真士「〝英雄譜〟諸本について」（『名古屋大学中国語学文学論集』、第二四号、一―一六頁、二〇一二年十二月）参照。

12 筑波大学附属図書館がオンライン公開しているものを使用した。http://www.tulips.tsukuba.ac.jp/mylimedio/search/book.do?nqid=4&mode=simp&database=local&searchTarget=BK&queryid=3&position=1&bibid=892332&detailCategory=book（二〇二〇年一月十日最終閲覧）

13 この場面では宋江の泣きが一箇所削除されている。その泣き描写が違う形となって直前に現れ出たものと思われる。

14 『水滸伝』における「忠」「義」及び「忠義」の定義については笠井直美「隠蔽されたもう一つの「忠義」―『水滸傳』の「忠義」をめぐる論議に關する一視點―」（『日本中国学会報』、第四四集、一七二―一八六頁、一九九二年十月）、荒木達雄「『水滸伝』に見える「義」の解釈」（『東京大学中国語中国文学研究室紀要』、第一三号、二二―四八頁、二〇一〇年十一月）等の論考がある。笠井氏は『水滸伝』の「忠義」とは損得や結果、自身の犠牲を考慮せず、他人のために力を尽くすことであり、その対象は本来限定されないとした。その対象は大まかに「朝廷」「仲間・義兄弟」「一般人・弱者」の三種に分けられ、その三者に対して本文では同様に「忠義」という語を用いていると氏は指摘する。このように本来は「忠」「義」「忠義」といった概念は様々な性質を持ち、一義的な定義付けはできないが、本稿では便宜的に「朝廷や主人に対する忠誠」を「忠」、「仲間や義兄弟に対する誠実さ」を「義」と称することとする。

15 容本の梁山泊好漢の泣き描写のうち、恐怖によるものと認定できるものは、護送役人に殺されそうになり命乞いをする林冲（第八回）と盧俊義（第六二回）が挙げられるのみである。

16 『水滸伝』文簡本の商業性と改変については、注4白木氏前掲書に指摘がある。

17 斉裕焜氏は比較的遅めに刊行された文繁本が既に流布している文簡本を参照して本文を改変した可能性について言及している（斉裕焜「《水滸伝》不同繁本系統之比較」『中国典籍与文化』、二〇一一年第一期、五三―六二頁、五五頁参照）。〈三―八〉及び〈三―九〉、そして〈三―十二〉の場面はその一例である。崇禎年間に編まれた金聖嘆本には次のような泣き描写が存在する。訳文は佐藤一郎訳『世界文学全集　水滸伝』（全二冊、集英社、一九七九年）による。

〈三―八・三―九（金聖嘆本第四三回）〉

【金聖嘆本】 訴説假李逵剪徑一事衆人大笑又訴説殺虎一事爲取娘至沂嶺被虎喫了説罷**流下淚來**宋江大笑道被你殺了四箇猛虎今日山寨裏卻添得兩箇活虎正宜作慶

（そこで、にせ李逵の追剝の一件を物語ると、一同はどっと笑った。さらに虎退治の話をして、母をつれて沂

嶺まできたところ虎に食い殺されてしまったと語り、涙を流した。宋江が今度はおおいに笑いながら、「あんたに虎が四頭殺されて、今日はこの山寨に生きた虎（青眼虎と笑面虎）が二頭ふえたという勘定だな。まことにめでたいこった」）

〈三―十二（金聖嘆本第六〇回）〉

【金聖嘆本】賈氏道丈夫路上小心頻寄書信回來説罷燕青**流涙拜別**

（賈氏は、「あなた、道中はなにとぞお気をつけなさいまし。手紙をせっせとお寄せくださいね」その言葉がおわると、燕青は涙を流して別れの挨拶をした。）

前者には「大書宋江大笑者，可知衆人不笑也。（宋江が大笑いしているのを大いに描くことで、皆が笑っていないことが分かるだろう。）」等の夾批があることから、宋江の非道さの強調を意図したものであろう。後者には「寫娘子昨日流涙，今日不流涙也，却恐不甚明顯，又特地緊接燕青流涙，以形擊之。（賈氏は昨日涙を流し、今日は涙を流さないが、これはおそらくあまり明確になってはいない。そのためわざわざ続けて燕青に涙を流させて、それでもって賈氏を際立たせているのだ。）」という夾批があり、賈氏の不貞さを浮き彫りにするために燕青を泣かせたと分かる。金聖嘆本成立時期からして金聖嘆が文簡本を参照していた可能性は十分あり、文簡本の描写を参考に改変を施したことも考えられる。

例えば、朱仝の入山の話（第一八回）では「聚義」のために子供を殺害している。人道的行為より「聚義」が優先されていると言える。

文簡本の田王故事の該当回は、劉本の第八五回から一〇六回、二本の第八二回から一〇〇回に当たる。双本は第三一回以降回数表示が消えるため、本章の原文引用時の回数は全て劉本に基づくこととする。

徳本の原文は宮内庁書陵部所蔵本を筆者が複写したものを使用。訳文は駒田信二訳『水滸伝』（百二十回本、全八冊、講談社文庫、一九九一年）に基づく。

笠井直美「『水滸』における「対立」の構図」（『東洋文化研究所紀要』、第一二二冊、四三―一一八頁、一九九三年十一月）、四七―四八頁参照。

注21笠井氏前掲論文、一〇八頁、注9参照。

18
19
20
21
22

23 注21笠井氏前掲論文、五三―五四頁参照。

24 注21笠井氏前掲論文、一〇八頁、注10参照。

25 劉本、二本は「穆弘」と作る。捕らえられた人物は、双本・劉本は「雷横等四人」、二本は「穆弘等四人」とする。実際に捕らえられたのは穆弘であるため、二本のみが整合性が取れていることになる。ここでの双本の「穆横」というのは「穆弘」と「雷横」が混ざったものと思われる。

26 明末清初の長篇白話小説の泣き描写については、注2吉永氏前掲論文及び注1前掲拙稿を参照されたい。金聖嘆本と同様、毛宗崗批評『三国志演義』でも作者自身が泣き描写を通じて自らの価値観を示そうとする姿勢が認められる。

27 笑い描写、怒り描写についての論考には、汪遠平「百種情懐百般笑―《水滸》的笑態描写」（『遼寧大学学報（哲学社会科学版）』、一九八四年第六期、五二―五七頁）、吉永壮介「『三国志演義』の怒りの諸相」（『藝文研究』、第一〇七号、六五―八四頁、二〇一四年十二月）等がある。